

子供の学習を支える教師の『学習の場づくり』の様相 —質問紙調査と授業中の発話分析から—



慶應義塾大学 教職課程センター

鹿毛 雅治 氏

本市では慶應義塾大学鹿毛雅治研究室と「学習意欲の視点からの授業研究」というテーマで共同研究を行っている。とりわけ、子供の学習意欲を引き出し主体的な学習を促す教師の指導について、教師、子供、授業といった複数のデータを用いて研究を進めている。今回はその中間レポートとして、教員質問紙調査と子供の学力の関連、さらにその結果を踏まえた授業分析の結果について、慶應義塾大学博士課程の佐藤雄一郎氏、及び兵庫教育大学の清水優菜氏に御報告いただいた。

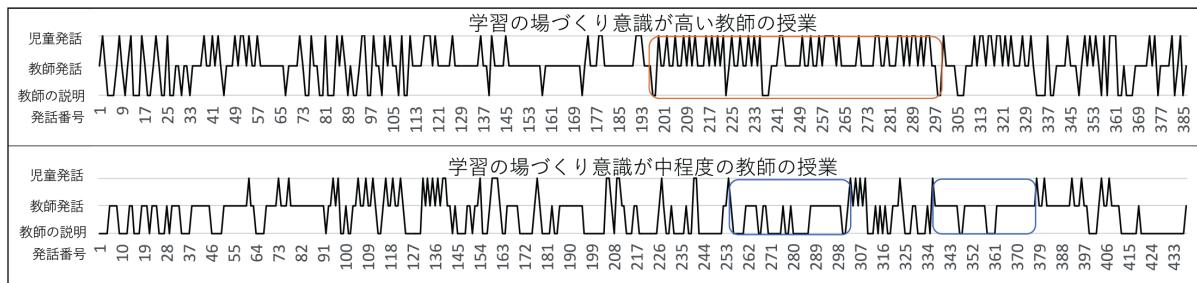
まず、「アクティブ・ラーニング指導用ループリック」に依拠した「指導方法」に関する質問紙調査に対する戸田市の教師のデータを分析し、その回答の背後にある要因（因子）を検討したところ、「目標設定」「学習評価」「見方・考え方支援」「習得支援」「学習の場づくり」という5つの因子が示された。さらに、これらの因子と子供の学力との関連を検討したところ、とりわけ「主体的な学び」や「対話的な学び」の支援に関わる「学習の場づくり」（表1を参照）が子供の国語と算数の学力と正の相関があることが示された。すなわち、「学習の場づくり」を意識している教師の学級の子供ほど国語と算数の学力が高い傾向にあることが示された。また、戸田市の教師の「学習の場づくり」意識の平均値は5段階評定で4.15と高い水準にあり、多くの教師は「学習の場づくり」を意識している傾向にあることが示された。

表1 学習の場づくりに関する項目

1. 子供たちに自ら解決の方法を考えさせ、見通しを持たせる場面を設けた
2. 子供たちが自分の考えを表現することができるよう、支援方法を準備し実行した
3. 子供たちが自分の考えを表現することができるよう、適切な時間や場の設定・ワークシート等の準備をした
4. 授業の目標に応じ、子供たちの考えを広げ深められるような学習形態（個人、ペア、グループ、全体）を設定した
5. 授業の目標に応じ、子供たちの考えを広げ深められるような教具（タブレットPC、ホワイトボード、ワークシート、具体物等）を用いた
6. 教科の学習内容について、子供同士での学び合いを促した

次に、「学習の場づくり」意識の高い、ないし中程度の教師の算数・数学の授業について、授業中の発話の推移を分析した。その結果を図1に記す。図1において、横軸は発話の時間的推移、縦軸の上段は子供の発話、中段は教師の発話、下段は教師の発話の中でも教師による学習内容の説明を表し、それぞれの点を結ぶことで発話の全体的な推移を可視化した。図1より、授業の中盤に着目すると、「学習の場づくり」意識の高い教師の授業では、子供と教師の発話が交互に認められた（赤四角部分）が、「学習の場づくり」意識が中程度の教師の授業では、教師の発話や説明が多く、子供の発話がほとんど認められなかった（青四角部分）。したがって、「学習の場づくり」意識は、特に授業の中盤における「子供の発話に応じた授業の展開」として顕在化する可能性が示された。

図1 学習の場づくり意識と授業発話の推移



以上から、子供の学習を支える教師の「学習の場づくり」の様相の一端が示された。しかし、本研究では、「学習の場づくり」における、教師の「認知」や「思考」は十分に検討できていない。今後は、一人ひとりの教師が授業で何を見て、いかに子供の学びや教室の状況を解釈し、それに応じた学習の場づくりを進めているのか、そういった点をさらに検討していきたい。



詳細な分析結果はこちら